



TITLE:

何のための研究か?(談話室)

AUTHOR(S):

蔵本, 由紀

CITATION:

蔵本, 由紀. 何のための研究か?(談話室). 物性研究 1969, 13(1): 38-44

ISSUE DATE:

1969-10-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87221>

RIGHT:

何のための研究か？

九大理 蔵 本 由 紀

(9 月 1 0 日 受 理)

「物性物理学をどのように進歩させるか」というテーマの懸賞論文が本誌で募集されている。かつて一編集部員だった関係上、私にも責任はあるのだが、今になってみるとこのテーマは何かしらひっかかるものを感じる。尤も内容としては、純学問的なものから研究教育体制に関係したものまで、十分広い範囲が許容されるという註釈がついているが、私はむしろ多少意地悪く、「物性物理学をどうして進歩させる必要があるか」に変えた方が良かったのではないかなと思う。尤もこうすると、ますます応募者が減るばかりで編集部は困るだろうが、それならばそれで、「研究の意味自体を問われるとなぜ研究者は黙るか」という問題を次に考えるのも意味があるのではなかろうか。

どうして進歩させる必要が（特に今という時代において）あるのか？ 何のために研究するのか？ この社会で（物理を）研究することは一体いかなる意味をもつのか？ 等々と問われて、「はい、それはかくかくしかじかの理由でございます。」とちゅうちよなく答える人は居るだろうか。私も答えられない。そもそもこういう類の問いに答えられなくなってしまったのが、「近代」という土壌ではぐくまれてきた私達の意識の特徴らしい。しかしながら、私達研究者が知らず知らずのうちにハマり込んでしまった深い道義的退廃や、それを不可避免的に推し進めている研究者の、矛盾した社会的立場をありのままに把握し、実践的に乗り越えようとするならば、どうしても私達が今までそこに埋設していた「研究」をいったん自分から切り離して客体化し、人間の実践、社会的実践総体の中でもつ意味を明らかにしてゆく作業を欠かすことはできないと思う。

何にもまして重要と思われるこの大問題が、現実にはせいぜい研究のあいまの茶呑み話程度の位置しか与えられていない。場合によっては、「良識的」研究者によってかなりまともに受けとめられるが、いざ事態が深刻になってくる

と、当初に示した深い「理解」はどこかへ雲消霧散し、なりふりかまわず「研究する権利」が主張される。総じてこの問いは、それが現実的意味をもちはじめや否やタブー視される。（私はこうした例を今回の学園闘争の過程でいくつか見てきた。）しかしタブーには例外なくその時代の秘密を解く鍵がかくされているのだ。

研究者は自分が暗によりどころとしている価値の中心が動揺する時、不安を押さえ切れず、無意識的に反撥を示すだろう。早く忘れたい！ 安らかな日常世界に戻りたい！ 日常生活をかき乱すものに対しては、まさに日常性を乱すという理由そのものによって敵視する。（京大1月の「狂気の3日間」を見よ。）研究の途上で時折、研究自体に対する懐疑は頭をよぎるが、そんなものは奥の方にしまっておいた方が安全だし、能率の点からも得策である。第一まともにとり組んだところで泥沼ではないか……。関心はもっぱら土台を切り離された専門的営為に向けられてゆく。あきらかにされるべき秘密は永遠に秘密のままにとどまる。こうして研究者は、個別文化領域の同一地平上で、意味の失なわれた無限の運動をくりかえす。

誰かが告発しなければならなかった。そしてそれは先進的な学生によってなされた。「輝しい」戦後の科学者運動の伝統をもつ私達研究者は一体何をしていただろう。告発されるだけならまだしも、告発に対してどんな対応を示したというのだろうか。ラディカルに運動が進むとき、地上にはあらゆるパラドクスがみちみちる。「進歩性」＝「反動」，「専門家」＝「馬鹿」……。戦後の科学者運動とは何だったのだろうか。どうして有効性を失ってしまったのだろうか。

戦後の一時期、民主々義科学者協会（民科）運動が隆盛をきわめた。それはわが国の戦後史のあらゆる意味での転換期、即ち、60年安保改定期までに完全に潰滅してしまっていたのだが、ともかく戦後10年間（1946～1956）、多い時には万を越える科学者が、自己の研究活動を、曲りなりにも人間生活の他の諸側面との連関の中で位置づけ、意味を見出すことに努力していた。そこではたしかに、「国民的科学」という把え方がはらむ問題性や、運動の党派的引き回しの問題があった。科学の発展が、非合理的な国家権力や支配形態（絶対主義的天皇制、封建的土地所有等）に対立するものとして指定され、科学を発展させること自体が、人民に奉仕するものとされた。また「ルイセンコ論争」

に見られるように、科学の機能ではなく理論内容そのものに人民的なものと反人民的なものがあるとされた（「科学の党派性」の問題）。そしてこのような民科の根本的誤りが、その後の科学の全面的体制編入という状況を迎えた時、運動を無力化させる原因となる。しかしながら、現在のように、個別科学における研究実践が、研究者にとって全く没意味化してしまうという状況は、当時にはまだなかったと思う。60年以後、状況は大いに変ってくる。60年までにほぼ復活をなしとげた日本資本主義は、アメリカとの間の帝国主義同盟を強化させる一方、アジアにおいては独自の勢力圏形成に向かって、経済援助、政治的浸透等を通じて影響力を拡大してゆく。そしてその傾向は、日韓条約をひとつのエポックとして、以後一層本格化してくる。これに対応して、国内では資本の集中とともに、企業合理化、管理の強化を促進させることによって、生産性の向上がはかられ、大学を中心とする学術・研究体制も着々と体制の中に組み入れられてゆく。特に自然科学部門では、技術の自主開発の要請もあって、研究・教育体制は第一義的に投資効果の面から方向づけがなされる。そして個別企業で負いきれない基礎研究を大学が受けもち、産業界との直接的結合をも強めてゆくのである。特に基礎科学振興の為の科学技術10ヶ年計画は、研究予算を操作することによって、業績主義、格差主義、重点主義を推し進め、研究者間の生存競争の激化を通じて、研究者の腐敗をもたらしていった。少し違った言葉で言うと、60年以後の日本は、管理社会的様相がいよいよあらわれはじめた時期であり、多少文明論的に言うと、「近代」がその諸特徴を極限的にまで顕在化させてきた時期である。それはまた、階級支配の方法が、明確に近代合理主義、実証的近代科学に基く時期（同時に近代合理主義が、社会の支配的イデオロギーになる。）に一致している。そうした時期においては、個別文化領域の部分的統合化はあるにしても、なお圧倒的に細分化が進行し、個別学問領域に疎外された人間は、研究実践と生との生きた絆を失い、それ自身が一つの至上価値として錯覚される。民科の思想的欠陥は、この時代に至って、平和と民主主義のための科学の発展 → 「科学の発展」の物神化 → 「個別科学の発展」の物神化、としてあらわれてくる。^{*} 価値系列が、互に他との連関なく、個々的に追求され、それを支える根底、あるいは価値系列間の緊張関係が省りみられないために、社会全体として、あるいは一個の人間全体として、

きわめて非人間的な体系（必ずしも「非合理的」な体系ではない）を形成していることに盲目となるのである。そこに脱イデオロギーが浸透し、現体制を内面から支えるものとして、逆説的に、それは高度の政治性を帯びるのである。

（民科で活躍したはずの多くの研究者が、日米科学、米軍資金導入等に関して、如何に鈍感であったかを見よ。）

技術を人間の手に回復するとはどういうことなのだろうか。私達は現在、それをかなり抽象的にしかイメージすることができない。アメリカはヴェトナム戦争に巨万の富と高度な戦争技術を駆使したが結局敗北した。あれは人間的な技術ではなかった。近代合理主義の限界だという人も居るが、私は必ずしもそうとは思わない。技術を駆使する“主”が問題なのだ。それに関してどこかで読んだことだが、北爆が激しく行なわれていた当時、北ヴェトナムの人達は、米軍が大型爆弾を落した後にできたくぼ地を溜池にして、魚類を飼って食糧源を補充したそうである。私達の常識から見ると、それは「技術」というには余りにも原始的かも知れない。しかしそうしたところに本当に人間と技術との生きたつながりが見られるような気がする。そこでは「何のための労働か」ということは明々白々である。何億ドルをつぎ込んでも、大型コンピューターを使っても、人間の全体性と技術とが切り離されたところでは、そうした生きた技術は生み出せないだろう。技術が幼稚だから人間とは技術との生きたつながりがあるのではない。星野芳郎氏は「朝日ジャーナル」'69 8・3 で、アメリカの月旅行計画と古代エジプトのピラミッド建設との類似性について述べているが、ピラミッド建設に従事した奴隷にとって、日々の労働が人間的目的を実現するためのプロセスとして生き生きと感じられたであろうか。逆に、高度の技術の発達が生み出した分業を生み、必然的に研究や労働と人間との、生きた連関を失ってしまうと考えるのは、ブルジョアジーが私達に与える錯覚にすぎない。

米) 武谷技術論においても、「技術」概念の規定が、人間と自然との関係に限定されているが、社会的実践としての「技術」は当然人間と人間との関係もその中に含まなければならない。この不充分さによって60年以後の状況に耐え抜くことができなかった。

現在の研究者運動といわれているものは、まことにみじめなものである。おしなべて、支配的イデオロギーにとっぷりひたっているようである。そこでは「研究者層」はア・プリオリに所与のものとして設定され、卑近な利害状況に密着することによって、「統一と団結」を見ようとする。諸要求獲得運動が一般に良いとか悪いとか言うのではない。問題は個々の要求獲得が、どんな根拠にもとづいて正当化されるか、ということ、を、根底までさかのぼって検討することが重要だと言うのである。この作業を抜きにしては、どんな運動も体制にまるめ込まれてしまい、合理化・近代化を単に補完し、あるいは先どりする作業に過ぎなくなるであろう。せいぜい、「全国研究者の自主的要求だから正当である。」という風なことにもなってしまう。そこでは個別学問へ疎外された研究者の特殊意識が先ず優先され、トータルな認識・実践主体としての人間の諸課題は完全に抽象化される。日常生活の基盤が、世界観と互に連関なく平和共存し、あるいは便宜的に関係づけられ、あげくの果ては、「良い科学と悪い科学」の通俗的使い分けが横行する。「二面性」理論で処理されることによって、より深い構造的把握は放棄されるのだ。科学技術の成果の総体が、現体制の下では、必然的に、ブルジョアジーに掌握されざるを得ないという基本的観点に立つ科学の階級性の問題は、科学の「善用・悪用」の問題へと矮小化されるのである。

「研究とは何か」「研究者とは何か」と深く追求してゆくとき、私達は先ず第一に、個別学問領域における研究活動というものが、元来超合理的な人間存在とどのような関係をもつべきなのか、ということをも明きらかにする必要があるのではないかと思う。科学論もこうした観点をふまえない限り、たとえば広重論文（広重徹「問い直される科学の意味」自然 '69 2）において、「価値観の転換」と言ってみても、それが外化された文化の一領域内で言われる時、武谷技術論を超える事はおろか、民科の「科学の党派性」論と analogous な誤りにすべり落ちてゆく危険なしとは言えない。私達は生まれた時から、潜在的には多様な可能性を秘めているのだが、現代社会では決してそれが全面的に展開される事はなく、生の全体性展開の一プロセスであるべき研究実践も、その本来的な意味を喪失し、かえって疎外物として人間を限定し、ちっ息させる。個別学問領域における研究は、主観的にはいかに興味深いものであっても、ト

一時的な認識主体としての人間にとっては、元来相対的な意味しかもちえないはずであり、決して至上価値とはなりえないはずである。しかしそれが現実には至上価値として実体化され、物神化されるのは、近代社会に特有なものとして形成される人間の意識構造にもとづいていると思われるが、私はこのことを緻密に展開する力をもたない。没意味化された学問研究の意味を、生の全領域との連関の下に問い直す、ということは、今回の学園闘争の中で、中心的な思想をなしており、それゆえにある人々からは「文化革命」とも呼ばれたのであった。

個別大学闘争に私達がいかほど力になりえたか、むしろ闘争の妨害者だったのではないか、という疑念をいだきつつも、私達研究者にとって（少なくとも出発点において）固有の、ぜひともとり組まなければならない課題があると思う。今春の物理学会の際、私達物性グループ有志主催のインフォーマル・ミーティングでとり上げられたのは、主に共同利用研究所の問題と地方大学問題であったが（「物性研究」4月号）、どういう視点からこの問題を把えるべきか、一番基本的と思われるポイントについて、私なりの考えを述べたい。

共同利用研、特に東大物性研の、東大関係者による私物化は目に余るものがある。これはもはや、「共同」利用研などと言えたものではない。少数の中央の研究エゴイストによって排他的に独占された、「東大第二理学部」である。尤も一部の人の例外があるのは知っているけれども、彼ら研究エゴイストの殆んどにとっては、あれほどし烈に闘われた東大闘争は、馬耳東風のできごとだったのだろうか。そうしたところに「学問的 peak」が出ようと出まいと、どうでも良いことだ。そんな「peak」は（出たという話も聞かないけれども）人間としての研究者にとって、何ほどの価値ももつものではない。たとえ「peak」など出なくても、物性研を、とりわけ研究条件に恵まれない地方大学研究者や、全国の若手研究者に、全面的に開放することの方が、はるかに人間にとっての進歩である。同時に、物性研に比べればまだ罪の軽い京大基研も、更に広く研究者に開放すること、以上が第一点である。（具体的・技術的なこと、例えば任期制等についてはここでは省かせていただく。）しかしながら、共同利用研が、その名の通り研究者の平等な利用に供せられれば（つまりそれが制度的に保障されれば）それで済むとは思わない。研究者の間の根深い不信、

怨恨を残したままで、研究手段がこまぎれに分け与えられても、それは小所有者意識をもつ多数の研究エゴイストを生み出すばかりで、何の進歩でもない。最も重要なのは、私物化の打破を通じて、私物化そのものを支えてきた私達研究者の内部に抜き難く巣喰っている腐敗を、鋭く告発してゆくことだと思う。もしそれを欠くならば、今後の研究者運動というものに本当の意味はないと思う。単に特権的な利益が損なわれたといううらみが残るだけで、小所有者意識が何ら変化をうけないならば、研究者の「連帯」や「団結」は全く意味をなさないだろうし、より強大な権力と闘うことなど到底できないのではあるまいか。こうしたこと抜きで語られる「連帯」は単に研究者のエゴイズムの方向において、偶然的な一致を見た、ということの表現にしか過ぎなくなる。研究者の間に、利害の対立があるからこそ、研究者運動というものの質的发展があるのだ、と私は思う。運動の質的发展というのは、獲得目標が運動の過程で、研究者間の利害の対立を媒介として、質的に高まる、ということである。研究者が常に利害を共にして、敵政府・文部省に対抗する、というような図式で示される運動は、本当の運動ではないと私は思う。それにつけても思い起される事は、「学問研究の発展」が同時に「反体制的」でありうると主張する多くの「進歩的」科学者の詭弁である。少くとも知的誠実性をそなえているはずの研究者なら、どこかこの論理はおかしい、と思うはずである。その論理は、何が何でも研究したい、という意欲に燃えている研究者にとっては、まことに好都合だが、（それだけになおさら犯罪的だと思うのだが）、「学問研究の発展」と主張されることさえが、実のところは、決して「学問の論理の貫徹」でもなく、しばしば「予算の論理の貫徹」に他ならず、講座増設、研究費の獲得、無方針な将来計画、等々をしゃにむに追求する際の大儀名分として機能しているように思われる。私達は「研究者であることを否定せよ」などとは到底言える資格はもたないが、少くとも懐疑的であることを身上とする研究者ならば、研究することの意味自体についても常に懐疑的であるのが最低条件だと思う。以上余りまとまりのない小論になってしまったが、皆さんの誠実な御批判をうけたまわりたいと思う。